2022年6月23日発行
THE JAPAN SOCIETY FOR INTERCULTURAL STUDIES
日本国際文化学会ニューズレター　51号
http://www.jsics.org/

日本国際文化学会事務局
龍谷大学国際学部松居研究室内
〒612-8577
京都市伏見区深草塚本町67
Tel:075-366-2223
Email:
jsics@world.ryukoku.ac.jp

しなやかで楽しい学会を引き継いで

日本国際文化学会会長　都丸潤子

馬場孝先生の後任として会長を仰せつかりました都丸潤子です。

馬場先生と前期執行部・各委員の先生方には、コロナ・パンデミックによる任期延長で、異例の３年間、前代未聞の状況下で学会のために多大なご配慮とご尽力をいただきました。心から御礼申し上げます。文化の十字路、長崎での素晴らしい2019年大会の際に、稲佐山からの美しい夜景を肩を並べて眺めた私たちの誰が、その後の２大会が書面・オンラインで開催されると想像しえたでしょうか？

人の国際移動が受け入れ社会・文化に豊かさをもたらすと授業で話す際、私は以前から「国境を越えて移動して害悪をもたらすのは、ウイルス、ミサイル、放射能だけだと思います」、と強調してきたのですが、この２年半近く、まさにそのうちの２つ、さらに今年２月からはウクライナに侵攻したロシアの軍隊も、多くの人々の命を奪い、苦しめ、悲しませています。そのミサイルや軍隊をどの国際機構も、政治家も、社会運動家も、研究者も、未だに止められていないこと、攻撃者との立場を超えた対話がほとんど実現していないことに胸が塞がる思いがいたします。

チェルノブイリ原発事故について、後にノーベル文学賞受賞者となったアレクシェービッチ氏が記した「私たちはみなチェルノブイリ人となった」という言葉以後も、私たちはみな「神戸人」、「福島人」となり、「シリア人」「ロヒンギャ」となり、そして「ウクライナ人」となったのだと思います。

苦しさの中ではなおさら、人々は連帯し、助け合い、工夫を加え、新しいしなやかな文化を創ってゆきます。本学会でも、書面・オンラインでの大会や常任理事会は、遠距離移動が難しい会員、子育て・介護中の会員にも参加しやすいことがわかり、近畿大学の高橋梓先生をはじめとした大会実行委員の先生方や学生諸氏の２年連続のご尽力と創意工夫のおかげで、温かみのある活発な大会とヴァーチャル・エクスカーションを楽しませていただけました。学会誌『インターカルチュラル』は小林文生先生をはじめ編集委員会の皆様のご配慮のゆきわたったお仕事によって、若手からベテランに至る幅広い会員のご研究や知見を発信し続けていただき、最新の20号も、ページ数が予定を超え、文字通り厚みを増しています。学会20周年を迎え、記念事業としての『国際文化学事典（仮称）』の編纂プロジェクトも、本学会ならではの多分野間交流の蓄積を最大限に生かし、菅野敦志委員長のもと、委員の皆様の自由闊達なオンライン会議とリーダーシップによって加速度的に進んでいます。７月には神戸大学での大会が、岡田浩樹実行委員長のもと、３年ぶりに対面開催で予定されています。

文化交流創成コーディネーター資格認定制度も、委員の先生方のご尽力により、プログラム参加校が着実に増え、8月にはオンラインで短期集中セミナーが３年ぶりに再開予定です。

このように、本学会が「共に生きる工夫」としての文化の研究と創成・発信を続けてきたことは、法務省にも着目され、「特定技能制度・技能実習制度に係る法務大臣勉強会」への出席の機会を頂戴しました。僭越ながら私が参加することになり、４月末に学会の紹介をさせていただきながら、国際文化学・国際移動論の立場から、現状分析と今後の改善について思うところをお話しして参りました。また３月には、焦燥感に突き動かされ、馬場先生とご相談をして、ウクライナ侵攻への抗議声明の提案をさせていただきましたが、常任理事の先生方、会員の皆様からそれぞれ貴重なご意見や温かいご支持・共感の言葉をいただいて、会員有志の形でHPに掲載することができました。この場を借りて改めて深く御礼申し上げます。

これらの発信の準備において痛感したのは、紛争や文化接触の現場にいる人々への共感、学会・研究者としての社会貢献を含めて、目的意識を共有する会員間の日頃の交流のありがたさと心強さでした。大会参加時にいつも感じられる、同窓会に参加したような楽しさと温かさの秘密がわかったように思いました。歴代会長が、この学会は「楽しい」とよくおっしゃっていたことも思い出します。顧問・常任理事の先生方に加えて、ご経験豊富でご配慮にあふれた松居竜五事務局長や、高橋梓先生、池田悦子様、新たにご就任の馬場先生を含めた幹事の皆様、副会長のお二人とご一緒にお仕事をさせていただけて、とても光栄で心強く思っております。私自身は至らぬ点が多々ありますが、これまでの20年、平野健一郎先生をはじめ創設者の先生方や歴代会長が目指され、会員の皆様が大切に育ててこられた、まさにインターカルチュラルな交流と楽しさを、維持し発展させるお手伝いを少しでもできれば幸いです。

どうぞよろしくお願いいたします。神戸大会で久しぶりに対面で皆様にお目にかかれますのを、とても楽しみにしております。

日本国際文化学会の20年をふりかえる
―１冊の古典の読み方の変遷と重ねて―

平野健一郎

日本国際文化学会が創設されたのは2001年11月、9.11同時多発テロ事件の直後でした。それからの約20年をふりかえると、激動の連続で、世界の振動は収まる気配すらありません。ベルリンの壁の崩壊に表象された冷戦の終焉に、一瞬、民主化への希望が高まりましたが、中東、イスラーム圏で続く戦争と紛争、各地で増加する難民を見て、21世紀はカオスの世紀と当初から予言する人もいました。2011年には日本を3.11東日本大震災が襲い、原発のメルトダウンという大災害が続きました。いつ何時どこから自然災害と、人の営みの結果としての、あるいは人間集団間の争いの結果としての災害が襲ってくるかもしれない不安と恐怖がいや増すなか、2019年末にはコロナウイルス感染症のパンデミック、2022年2月にはロシアによるウクライナ侵略が私たちをさらなる不安と恐怖で取り囲みました。

ある１冊の古典の、私個人による読み方の推移と重ねて、国際文化学会の創立20年を回顧するのは大変僭越ですが、その古典が「国際文化学」の必読書であることに免じてお許しください。

新しい「国際文化」の視点

その古典とは、イマヌエル・カントの『永遠平和の為に』（1795年）です。私は1970年から東大教養学部で「戦争を知らない子供たち」である後輩たちに「国際関係論」を講義することになりましたので、『永遠平和の為に』に触れるようにしました。カントはその書で、国家間の永遠平和のために必要な条件として三つの確定条項を挙げました。第一の確定条項は「どの国であれ、市民のあり方は共和的であるべきである」。第二の確定条項は「国際法は自由な国家の連合に基づくべきである」。そして、第三の確定条項は「世界市民法と友好の条件」であり、普遍的な友好の条件として、すべての人に「訪問権」（Besuchsrecht）なる権利があることを主張していました。それらに解説を加えましたが、初めのころは文献の字面を追うだけの、おざなりな講義であったと思います。日本が再び国際的な孤立に陥ることを怖れ、国際社会が日本と日本人に平和と名誉ある地位を用意してくれることをひたすら希望するだけだったと思います。

1980年代から90年代にかけて、世界の国際関係論の学界では国民統合論の研究が盛んでしたので、私もその末端に加わって、日本とアジア諸国の国民統合の歴史を勉強しました。その過程で、近代化という文化変化が各国の国民統合や国力を左右することに気づきました。また、同じころ全国的に盛んになった民間の「国際交流」活動に私も参加し、その活動を新しい歴史として意義づけました。

しかし、国際文化学会はこうした先行現象を受けて、20世紀から21世紀の変わり目に、「国際文化交流」という、何か明るい活動を行なえば、冷戦の終焉のご褒美に与かれるだろうなどという目論見で設立されたわけではなかったと思います。年報『インターカルチュラル』の創刊号（2003年5月）に寄せた「創刊の辞」で、私は「国際関係の主体の地位を国家が独占した「近代」という時代が、20世紀の終わりとともに、終焉期に入り始めた」と述べ、「その変化に応じて、現代国際社会を活動と考察の場とし、そこで展開される人々の営みである文化と、文化間の関係を、新しい視点から総合的に研究、教育する必要が強く感じられるようになりました」と述べました。

20世紀後半から、各国の人々が実際に国境を越える移動が圧倒的に増えました。その結果、「全体社会としての国際社会」が見え始め、重層的な構造をもった国際社会と、そのなかで複合的なアイデンティティをもって生き続ける人々とに呼応して、文化の関係、文化の変化を考えるためには、新しい「国際文化」という視点を欠くことはできないというのが私の主張でした。従来とは異なる「国際文化」の視点として、たとえば、「文化の一元化」ではなく、「文化の多様性」を擁護する価値観を挙げました。

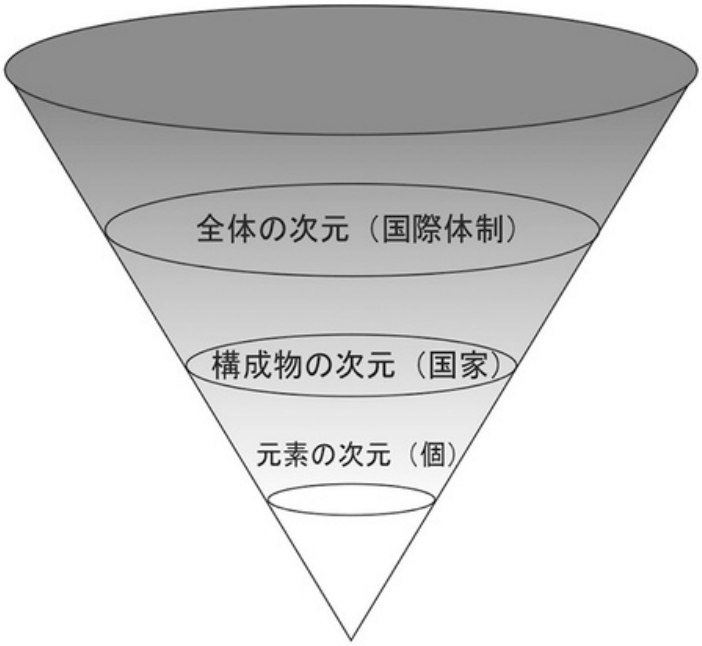
Immanuel Kant
1724-1804

カントの訪問権

ところで、「訪問権」とはどんな権利でしょうか。私自身は最初、大哲学者が「訪問権」などということば遊びをして面白いな、学生たちも面白がるだろうな、程度の反応でした。1980年代のある時、外界からの刺激を受けて真剣に読み直してみると、世界市民法というものがあるとすれば、それは普遍的な友好によって規定されているべきであって、友好―客として遇されること―とは、ある外国人が他の国の領土を踏んだというだけの理由で、その国の人々から敵としての取り扱いを受けない権利を持つということである、つまり、誰もが訪問の権利を持つ、というのです。この「訪問権」は、人間が地球表面の共同所有の権利に基づいてお互いに友好を結ぶために、すべての人間に与えられている権利だとされます。地球表面は球面をなしているので、人間が無限に分散してその上に拡がることはできず、結局、並存することをお互いに忍び合わなければならないというのです。ちなみに、カントが訪問権の根拠を地球表面の共同所有に求めたのは、彼が1755年にケーニヒスベルクでリスボン大地震を体感したことを受けていると思います。

カントの「訪問権」は国際文化的な理念だと理解できました。カントは文明先進国が「訪問」を「略奪」に変え、戦争と貧困を頻発させていることを弾劾しました。そして、日本と中国の鎖国政策を賢明であったと評価しました。また、「言語と宗教の相違は、自然が民族の混合をとどめ、分離しておくための、二つの手段である」と述べ、むしろそれらの違いが「文化を引き上げ、より広い調和へと人間を近づける」だろうとも述べていました。今日では、カントは「多文化主義者」であったといえるかもしれないと、カントを近しく感じるようになりました。

カント『永遠平和』の三層構造（図）



シニシズムを超えて

カント「永遠平和」の三つの確定条項の一つ一つにこだわっていた私は、ある時、全体を全体として読み直す必要に気がつきました。第一条項は国家の体制のあり方を確定しようとしたもので、構成主体に関する議論の範疇に属しますから、全体の真ん中辺のレベルに位置づけます。第二条項は国際体制のあり方を論じたもので、世界の全体に関する議論の範疇に属しますので、全体の上部に置きます。第三条項は「訪問権」の理念を提示したもので、「訪問権」の保有者は個人ですから、議論の範疇としては個あるいは原子に関する議論ということになります。

私たちは「国際社会は重層的で・・・」といいますが、どういう層がどういう構造で重なっているかをいわずにすませてしまいます。それに対してカントは、世界という複合的な全体を「全体―構成物―元素」の３次元（大・中・小の３次元）をもつものとして、そのエッセンスを示していたのです。永遠平和を考えるためには三つの次元上の連立方程式群を同時に解こうとすることが必要であると、必要な思考の構造を示すことがカントの狙いであったということにある時気がついたわけです。

三つの次元上の連立方程式群を同時に解き、解を鼎立させるのは容易ではありません。1970年ごろからの半世紀間に出された「多文化主義」、「多様性（ダイヴァーシティ）」、EUにおける「補完性（サブシディアリティ）原理」、持続可能性（SDG's）などの新しいアイディアは解を探る努力の産物ですが、まだ完全な解には至っていません。しかし、だからといって、第一の次元を占奪して、悪の道を突き進むことを厭わない政治のプロたちに任せておくシニシズムからいつまでも脱却しないでいるのではダメでしょう。

国際文化学会では創立20周年を記念して、「国際文化学事典」を編集・出版すると伺っています。老・壮・青の会員の叡智を集めた事典が出来ることを確信しています。それは、カントでストップしてしまっている「世界永遠平和」への道を新しく拓く研究成果と示唆に満ちているに違いありません。

第21回全国大会のお知らせ（2022年7月9日・10日開催）
大会テーマ「人の移動、文化の移動—世界から宇宙へ」

2022年度第21回全国大会開催要項

日時

2022年7月9日（土）～10日（日）

大会会場

神戸大学鶴甲第１キャンパス
（JR六甲道駅・阪急六甲駅から神戸市バス16系統に乗車、神大国際文化学研究科前下車）

参加方法

事前申込：学会メーリングリストで通知する専用フォームからご登録をお願いいたします。
申込は7月4日（月）まで。

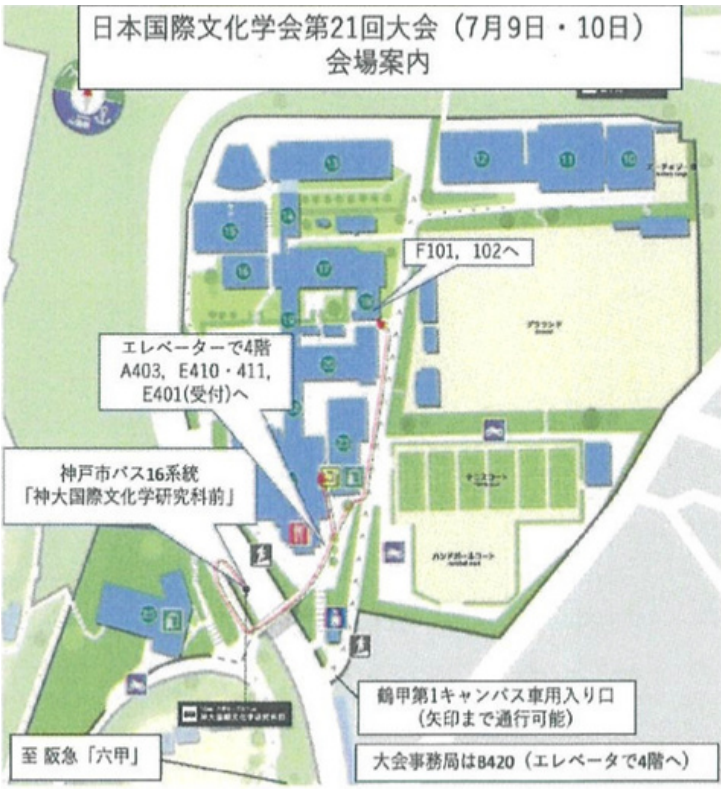
大会参加費

一般会員：2,000円
非会員：3,000円
学生・院生：1,000円
参加費は当日会場でお支払いください（釣り銭のでないようご準備をお願いいたします）

【大会日程】

7月9日（土）
9:00～12:15　自由論題A～E
12:15～13:15　昼休み
大学院生交流会・理事交流会
13:15～15:15　共通論題１
15:30～17:30　シンポジウムＡ
17:30～18:00　情報交換会

7月10日（日）
9:00～10:30　自由論題F～H
10:45～12:45　共通論題２・３
12:45～13:30　昼休み・総会
平野健一郎賞授賞式
13:45～14:45　フォーラム
15:00～17:00　シンポジウムＢ
※　シンポジウムA・Bはオンライン参加可能。
それ以外については対面のみの開催。



【お問い合わせ先】
第21回全国大会実行委員会（担当：岡田 浩樹）　jsics2022@gmail.com

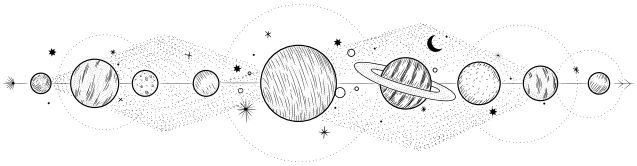
第 21 回全国大会 1 日目　7 月 9 日（土）

08:30～　受付　《鶴甲第 1 キャンパス E 棟 401》	
09:00～10:30　自由論題 A・B・C	
自由論題 A 「日本と近現代」 司会： ウィルソン・エイミー （山口県立大学） 《F101》	日本近代化への歩みに対する知識人の警鐘—朝河貫一を中心に 渡邊 剛（早稲田大学 アジア太平洋研究科博士後期課程）
	なぜ日系ハイクの俳人がブラジルハイカイに進出したのか—雑誌『雪』『PORTAL』との関わりから　白石 佳和（高岡法科大学准教授）
	Internationalization at Japanese Universities: The Challenges of Reforming “Insular” Organizational Practices　Theo Šlogar　（龍谷大学　国際文化学研究科博士後期課程）
自由論題 B 「戦争・平和・価値創造」 司会： 大形 利之（東海大学） 《F102》	近代性の克服—アフリカの文化とローカルナレッジへの偏見と差別の根源 鍋島 孝子（北海道大学教授）
	戦争記憶と日系人表象—「モデル・マイノリティ」言説と「日本人論」の関連性に注目して　阿部 純（東北大学　国際文化研究科博士後期課程）
	「非核都市宣言」と草の根における平和問題—「岡垣町核兵器廃絶平和の町宣言」を事例に　大和 裕美子（九州共立大学准教授）
自由論題 C 「社会を再建・構想する」 司会： 湯浅 拓也（大阪産業大学） 《E401》	剣とペンと台湾引揚者—松川久仁男にみる戦後沖縄の再建 菅野 敦志（共立女子大学教授）
	全体主義に抗する全体主義？—第二次世界大戦勃発期のスイスにおける社会構想 葉柳 和則（長崎大学教授）
10:45～12:15　自由論題 D・E	
自由論題 D 「ジェンダーとメディア」 司会： 杉村 美紀（上智大学） 《F101》	称賛されるニッポン—東京 2020 夏季オリンピック関連報道を事例として 齋藤 大輔（青山学院大学地球社会共生学部准教授）
	日中のテレビドラマにおける独身女性表象—『問題のあるレストラン』と『歓楽頌』の比較から　呉 程穂（長崎大学　多文化社会学研究科博士後期課程）
	国際的な音楽交流における仲介者の役割—テレビマンユニオン制作の音楽ドキュメンタリー番組を事例に　山田 直子（商社勤務・放送大学大学院修士課程修了生）
自由論題 E 「移住・移民」 司会： 目黒 志帆美 （石巻専修大学） 《F102》	Armenian Refugees in Early 20th c. Japan Meline Mesropyan（GSICS fellow, Tohoku University）
	在日朝鮮人の国際移動に関する史的考察—権利と「許可」の狭間で 崔 紗華（同志社大学助教）
	「テレワーク移住」へと連なる「逃れる」と「求める」の諸相—「ライフスタイル移住」の変遷から考える　山本 悟（山口県立大学　国際文化学研究科修士課程）
12:15～13:15　昼休み	大学院生交流会／理事交流会

13:15～15:15　共通論題 1	
「地域社会の国際文化：『歴史総合』を機に考える神奈川の地域史」 司会：加藤 恵美（帝京大学） 《E401》	発表者 藤田 賀久（多摩大学講師） 加藤 恵美（帝京大学講師） 中山 拓憲（神奈川県立湘南高校世界史教員） コメンテーター 都丸 潤子（早稲田大学教授）
15:30～17:30　シンポジウム A	
「国際文化学の今日—移民と多文化共生」 司会： 工藤 晴子（神戸大学） 《E401》	基調講演 21 世紀におけるアメリカ合衆国の移民・難民問題 小井土 彰宏（亜細亜大学）
	パネルディスカッション 日本におけるベトナム移民　野上 恵美（武庫川女子大） EU 圏のディアスポラ　松井 真之介（宮崎大学） パネリスト：野上 恵美、松井 真之介、小井土 彰宏
17:30～18:00　情報交換会	

第 21 回全国大会 2 日目　7 月 10 日（日）

08:30～　受付　《鶴甲第 1 キャンパス E 棟 401》	
09:00～10:30　自由論題 F・G・H	
自由論題 F 「芸術とヴィジョン」 司会： 趙 貴花（名古屋商科大学） 《F101》	1900 年パリ万博のルイユに見るアクセリ・ガッレン＝カッレラの選択 田中 佑実(北海道大学専門研究員／非常勤講師)
	鄭伯奇の革命文学観について—『帝国之栄光』と『軌道』を中心に 曽 小蘭（東北大学　国際文化研究科博士後期課程）
	変容不可能な文化要素としての「永遠」の主題—プルーストのボードレール受容に基づく文化触変モデル理論拡張の試み　高橋 梓（近畿大学准教授）
自由論題 G 「文化交流・文化外交」 司会： 芝崎 厚士（駒澤大学） 《F102》	戦前期の奈良を舞台とする「広報文化外交」—海外要人の訪問先から見える日本の自画像　藤田 賀久（多摩大学講師）
	韓国民衆歌謡が映し出す文化的表象性—朝鮮半島の南北関係 齋藤 絢（名古屋外国語大学准教授）
	シンガポールにおける自国像形成—インターナル・ブランディングの観点から 坂口 可奈（北海商科大学講師）
自由論題 H 「家族・記憶・建築」 司会： 川崎 賢一（駒澤大学） 《E401》	家族の「外部不経済」—現代社会の「家族」の限界を考える 相原 征代（北陸大学准教授）
	沖縄移民と「よりどころ」—アルゼンチンにおける移民たちの紐帯と文化 月野 楓子（沖縄国際大学講師）
	建造物の「破壊と再生」過程と文化的記憶の在処をめぐって—ベルリン王宮再建に関わる議論から考察する　斉藤 理（山口県立大学教授）



10:45〜12:45　共通論題２・３	
共通論題２ 文化と大衆—文化の「大衆性」と「多様性」」 代表者・司会： 鈴村 裕輔（名城大学） 《F101》	幕末維新期の日本における文化接触とその影響 鈴村 裕輔（名城大学准教授） 大衆文化としての民間伝承の受容—『鬼滅の刃』竈門禰豆子の「口」をめぐる不思議 植 朗子（神戸大学協力研究員） コメンテーター 飯森 明子（早稲田大学特別センター員）
共通論題３ 「アドボカシー・デモクラシー・多文化共生　国際文化学からみた高橋良輔の学問的意義」 代表者・コメンテーター： 芝崎 厚士（駒澤大学） 司会：馬場 孝（静岡文化芸術大学名誉教授） 《F102》	「引き裂かれた国際協力 NGO—アドボカシー活動を取り巻く政治空間の伸縮」 大山 貴稔（九州工業大学） 「公共性の再構造転換？アドボカシー・ポリティクスと国際公共性の再考」 西海 洋志（聖学院大学）
12:45〜13:30　昼休み・総会《E401》 第 12 回平野健一郎賞授賞式《E401》	
13:45〜14:45　フォーラム　学会 20 周年記念事業《E401》	
15:00〜17:00　シンポジウム B	
「国際文化学の現在と未来—世界から宇宙を考える、宇宙から世界を考える」 司会：岡田 浩樹 （神戸大学／宇宙人類学研究会） 《E401》	基調講演 地球／月圏での人間社会の構築に向けた人文・社会科学研究 柳川 孝二（元 JAXA 有人宇宙技術開発、宇宙飛行士の訓練や搭乗調整を担当。2008 年宇宙飛行士選抜を担当／現：宇宙人文社会科学研究会世話人） パネルディスカッション パネリスト： 清水 順一郎（JAXA、元筑波宇宙センター所長） 立花 幸司（千葉大学） ディスカッサント：樋口 清司（JAXA 元副理事長） 全体ディスカッション

大学院生交流会 in Kobe

葉柳和則（副会長）

大学院生交流会担当の葉柳和則（長崎大学）と申します。本学会では学会の将来を担う大学院生の交流をバックアップするために大学院生交流会を実施してきました。残念ながら、一昨年度、昨年度はコロナウイルス問題のため全国大会がオンラインでの開催となったため、交流会を実施することができませんでした。しかし、第21回全国大会は神戸大学において対面式で開催する方向で準備を進めています。これを受けて、2年ぶりに大学院生交流会を実施することにいたしました（状況によってはオンライン開催）。

大学院生交流会の方法については、これまで種々の試みがなされてきました。今年は、**院生交流会を通じて生まれたネットワークを生かして、来年の全国大会において大学院生主体の共通論題を開催**というコンセプトで実施することにいたします。

大学院生のみなさんは、遅くとも数年のうちに博士論文を執筆し、自立した研究者として活躍することになるでしょう。その際、自分と問題意識や研究手法に関してなんらかの共通点を持つ他の研究者に共同研究を提案し、一緒にシンポジウムを開催したり、その成果にもとづいて共著の研究書を公刊したりする機会に何度も遭遇するはずです。

今年の大学院生交流会は、この「他の研究者に共同研究を提案し、一緒にシンポジウムを開催」というプロセスを、一種のミニシンポジウムである共通論題の共同開催を通して経験するきっかけ作りという性格を持っています。（次ページへ続く）

来年の共通論題までの展開については、おおよそ以下のように計画しています。
〈事前の準備〉
1. 今年の全国大会の参加申込がおおよそ確定してから、院生会員に連絡を取り、大学院生交流会への参加をお願いする。
2. コーディネーターが参加予定者の研究テーマを確認して、テーマが近接している3人～4人のグループ作りを提案する。
3. 事前に、グループごとに連絡先を共有し、お互いの研究テーマについての理解を深める。
4. 「このグループで共通論題を開催するとすればどのようなタイトルと内容になるか」アイデアをふくらませる。

〈院生交流会当日（2022年7月9日）〉
1. 院生交流会の当日、直接顔を合わせて、共通論題についてのアイデアを交換し、暫定的なタイトルと内容を決める。
2. 院生交流会の最後に、1について簡単に口頭発表する。

〈事後活動：共通論題の準備〉
1. 各グループは、オンラインないし対面の研究会を随時開催し、共通論題の輪郭を明確にする。
2. 他の院生や若手研究者に参加を募るなど、報告者の陣容を整える。
3. 共通論題を申し込む（2022年12月31日）
※2023年7月、共通論題開催。

事後活動として開催する対面の研究会、および共通論題の実施については、日本国際文化学会として一定の予算を付けることにしています（詳細については後日）。
コーディネーターとして、森川裕二（社会科学系）、葉柳和則（人文学系）が、当日の大学院生交流会のみならず、事前準備・事後活動も含めて、アシストする体制を整えています。
このように今年の院生交流会は、一過性のイベントに終わることなく、将来の共同研究や科研費申請のための若手研究者のネットワーク構築を後押しすると同時に、「自分たちが主体となって共通論題を開催した」という実績作りの場として機能するよう計画されています。大学院生のみなさんから、共通論題の〈萌芽〉が数多く提案されることを楽しみにしています。

事務局からのお知らせ

2022年度ICCO短期集中セミナー 追加募集のご案内

ICCO（文化交流創成コーディネーター）事務局では、2020年度・2021年度とコロナ禍のために短期集中セミナーを中止しておりましたが、今年度は開催方式を変更し、オンラインにて実施いたします。2015年から京都や沖縄にて開催してきたセミナーをオンラインにて開催するのは初めてのことです。例年、全国のさまざまな地域の大学から参加があり、異なる大学・学年の参加者が研修期間中に議論を交わし、フィールドワークを通じ共同作業として成果をまとめて発表しています。今回のオンラインでのセミナーでの、目標を共有しながら様々な地域をまたいで作業を取りまとめる作業は、インターカルチュラルな経験になることでしょう。
当初5月末までの募集としておりましたが、まだ若干名の参加が可能となりましたのでご案内いたします。申し込み詳細は学会ウェブページをご覧ください。
ICCO短期集中セミナー開催概要は下記のとおりです。

期間：2022年8月22日（月）～9月3日（土）
※8/22～24、28、9/3は全員参加

実施方法：オンライン開催
参加費用：5,000円
（フィールドワークにかかる費用や通信費は含みません）

会費納入のお願い

2022年度の年会費の納入をお願いいたします。
一般会員：10,000円、大学院生：5,000円、学部生：2,000円
◆ゆうちょ銀行からお振込みのとき◆
記号番号　00920-8-325835
日本国際文化学会（ニホンコクサイブンカガッカイ）

◆ゆうちょ銀行以外等からお振込みのとき◆
ゆうちょ銀行　店名〇九九　店番099
当座預金　口座番号0325835
※ニューズレター48号（印刷版）にご案内しておりました普通預金口座への納入も可能ですが、上記の振替口座（当座預金）への納入にご協力お願いいたします。

【編集後記】
今号から近畿大学の高橋梓がニューズレター担当です。
6月に本学会の白石さや顧問を近畿大学にお呼びし、学生対象の講演会を開催しました。白石顧問に心より感謝申し上げます。

講演会前日、白石顧問との飛鳥エクスカーションが実現しました！
中央に白石顧問。会員・近大生有志、高橋家も参加！高松塚古墳の前での記念写真です。